姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第 107 集

河野遺跡

― 第１次発掘調査報告書 ―

2021年3月

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、約1,200か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。このたび発掘調査を実施しました河野遺跡のある田寺四丁目周辺は夢前川東岸に位置し、付近には市を代表する弥生時代の集落跡である辻井遺跡などが所在し、播磨地域の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。このたびの調査は、河野遺跡では初めての本発掘調査であり、地域の歴史解明の一助になるものと考えております。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和3年（2021年）3月
姫路市教育委員会
教育長　松田克彦

ー例言ー

1. 本書は、兵庫県姫路市田寺四丁目地内で実施した河野遺跡（遺跡番号：020200）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、シティハウス株式会社による宅地造成工事に先立って実施した。発掘調査及び出土品整理作業、発掘調査報告書刊行は、事業者であるシティハウス株式会社の委託を受け、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施し、これらに係る経費は事業者が負担した。
3. 発掘調査は令和元年度、整理作業、報告書の編集は、令和元年度から令和2年度に実施した。調査及び整理の体制は下記のとおりである。

姫路市教育委員会　令和2年度現在　　（　）内は、令和元年度に在籍した職員
教 育 長　　松田克彦
教育次長　　岡本 裕　（坂田基秀）
生涯学習部
部　　長　　福永安洋　（沖塩宏明）
文化財課
課　　長　　大谷輝彦　（花幡和宏）
技術主任　　関 梓
埋蔵文化財センター
館　　長　　松本 智　（前田光則）
課長補佐　　岡﨑政俊、森 恒裕
再 任 用　　竹井宏文
技術主任　　小柴治子【調査・整理担当】、中川 猛、福井 優、南 憲和
技　　師　　山下大輝（黒田祐介）

4. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。
5. 発掘調査・出土品整理及び報告書の作成にあたっては、下記の方々・機関より御協力・ご教示を賜った。深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）
石田為成、篠宮 正、白石 純、村田 晋

ー凡例ー

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
2. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
3. 本報告書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種の表記は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』記載の略号を使用した。
4. 文章中の引用文献は、［文献（参考文献番号）］と記載する。
5. 弥生時代の時期区分・遺物の記述については、下記の編年案を参考とした。文章中で時期にふれる場合は、編年案で設定された時期との併行関係を想定している。
長友朋子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編―』2007　大手前大学史学研究所

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査地の位置

第１節　調査に至る経緯

姫路市田寺四丁目 362 番、364 番、366 番、378 番１において、宅地造成工事が計画され、文化財保護法第 93 条に基づく届出がなされた。(図 1)。開発区域は東側が周知の埋蔵文化財包蔵地である河野遺跡（県遺跡番号 020200）に該当している。河野遺跡は昭和 46 年に作成された全国遺跡地図に弥生時代の散布地として記載されるなど、古くから遺跡として周知されていた。しかし、過去に実施された確認調査等では遺構・遺物は検出されておらず、遺跡の様相は不明であった。

令和元年(2019 年)9 月 7 日に試掘・確認調査を実施したところ(調査番号:20190297)、弥生時代中期の竪穴建物跡や柱穴などを検出し、遺跡が良好に保存されていることが判明したため、工事に先立ち本発掘調査を実施することとなった。本調査は、河野遺跡第１次調査にあたり（調査番号：20190365)、調査期間は令和元年(2019 年)10 月 9 日から 11 月 22 日である。

第２節　調査地の位置と周辺の遺跡

河野遺跡は姫路平野の北西部に所在する。夢前川中下流域、菅生川との合流地点東岸の振袖山・蛤山北麓に位置し、標高は T.P.24m前後である。周辺には縄文時代から中世にかけての集落跡である辻井遺跡、その中央付近には７世紀後半の創建とされる辻井廃寺がある。南には昭和 22 年に今里幾次氏が瓦を表採し、周知されることとなった今宿遺跡や近年の調査で遺跡の様相が明らかになりつつある山吹遺跡、南東には石製銅鐸鋳型が出土したことで著名であり、また古代山陽道の草上駅家の候補地のひとつとされる複合遺跡である今宿丁田遺跡など、市内の主要遺跡が存在する（図 1)。

調査は工事範囲のうち、水道、下水道敷設範囲を中心とした 273 ㎡を対象に実施した(図 1)。造成土等の除去を機械掘削により行い、それ以後の精査は人力によって行った。写真撮影、実測完了後に埋戻しを行い、現況に復している。

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　調査区の基本層序

調査範囲はカギ型に屈曲していることから、屈曲部で調査区を分割し、1～3 区と呼称した(図 2)。基本層序は、耕土、基盤層であるにぶい黄色細砂(図 3-16 層)の順で、部分的に基盤層が砂、粗砂、砂礫に変化する(図 3-17～20 層)。遺構検出面である基盤層上面の高さは、現地表面から 0.1～0.2m下の T.P.24.3mを基本とするが、1 区の西部、2 区の南部および 3 区の東端は地形が低くなっており、広範囲で黒褐色の自然堆積層を検出した。基盤層の高さは、最も低い 2 区の南端で T.P.23.7m と約 0.5m低くなり、土質もシルトや砂礫に変化していた。また、3 区の西端では基盤層の土質に変化はないものの、遺構検出面は T.P.23.0m と低くなっていた(図 3)。

第２節　調査成果

調査区が狭小であることから、遺構全体を確認できた例は少ないものの、竪穴建物跡のほか、溝、土坑、柱穴を確認した。以下種類ごとに主要遺構の詳細を述べる。なお、遺構番号は図 2 に示すとおりである。

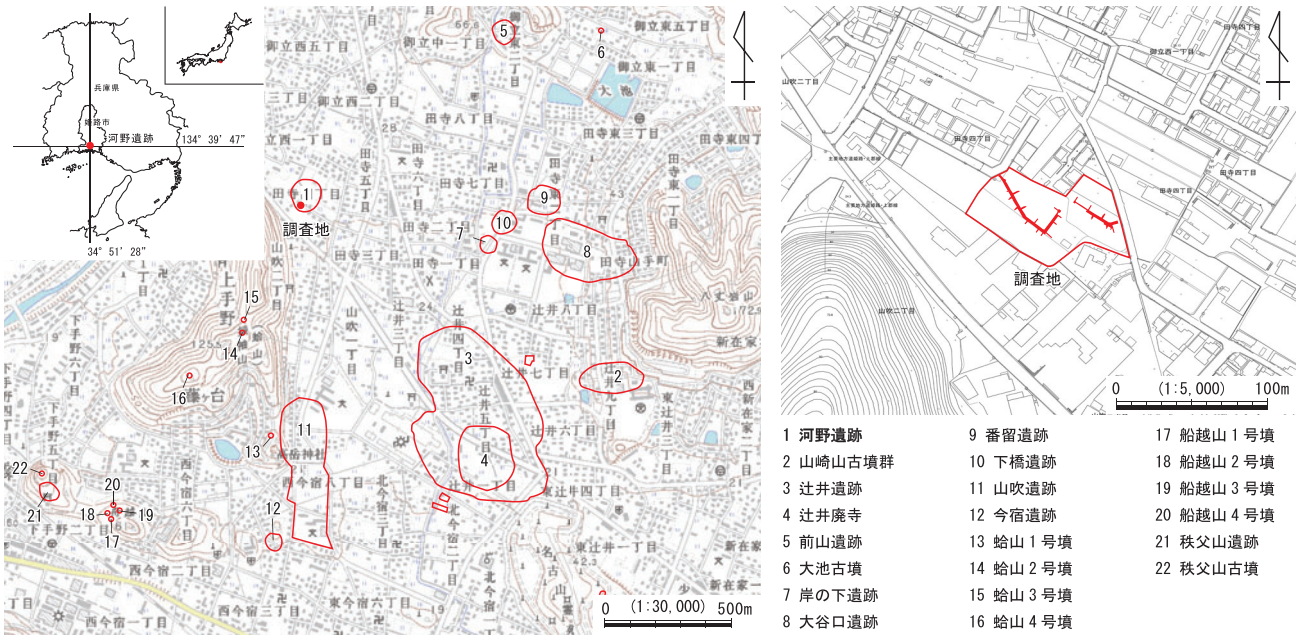


図1　周辺の遺跡と調査の位置

1. 竪穴建物跡

SI1～SI8(SI5は欠番)の7基を検出し、SI6、SI8は検出のみにとどまった。

SI1(図4)は、南西隅の1.5m×0.4m分を検出した。検出プランが直線に近いことから平面形は方形か多角形との可能性が考えられるが、詳細は不明である。深さは0.2mを図り、床面の高さはT.P.24.15mである。中央付近から台付壺が出土した(図 14-1)。脚部は完形に近いものの体部は屈曲部から下半が残存するのみで器種の詳細は不明であるが、播磨周辺の出土例から長頸壺、直口壺、短頸壺、無頸壺、鉢などの可能性が考えられる。胎土分析の結果、「地元産の可能性が推定される」が、高杯以外の長脚付の器種は播磨地域では出土例が少ないうえ、体部下半外面に多角形状の横方向のミガキが施されている点では、吉備地方の影響がうかがえる【註】。台付壺の特徴から、遺構の時期は弥生時代中期(Ⅳ期)末から後期（Ⅴ期）初め頃と考えられる。

SI2(図5)は、1区東端で検出した。検出範囲は、建物南西側の1.6m×0.6m分である。検出範囲が狭小であることから平面形は不明である。遺構検出面からの深さは 0.2mを測り、床面の高さは、T．P.24.15mである。埋土から、サヌカイト製の石剣が出土した。先端部が破損していたが、残存長は12.2㎝、最大幅3.2㎝、最大厚1.4㎝、機能部の残存長は、6.0㎝、重さ60.93ｇである(写真 31-16)。遺構の時期は、弥生時代中期（Ⅳ期）と推定されるが、土器が細片のため詳細は不明である。

SI3・4(図6)は1区中央付近で重複して検出した。SI3の方が新しく、直径4.7mの円形を呈する。遺構検出面からの深さは 0.38mで、床面の高さは、T.P.24.0mを測る。検出範囲が限られていたため、主柱穴や燃焼施設等は確認できなかったが、北側壁沿いに幅0.15～0.2m、深さ0.05mの周壁溝を検出した。また、調査区北壁沿いで直径 0.5m、深さ 0.12mのピットを確認した。遺物は、埋土上層から広口壺が出土した(図 14-2)。口縁部外面に凹線と円形浮文、内面に櫛描直線文と櫛描波状文を施文する。弥生時代中期後半(Ⅳ期)の時期があてられるが、出土位置が埋土上層であることや、建物が小規模であることから弥生時代後期（Ⅴ期）に下る可能性も考えられる。

SI4は直径7.3mの円形を呈する。深さは遺構面から0.43mで、床面の高さはT.P.23.95mである。検出範囲が限られていたため主柱穴や燃焼施設等は確認できなかったが、北側壁沿いに幅0.2m、深さ0.05mの周壁溝をわずかに検出した。埋土に炭化物や焼土が多量に混入しており、炭化材が出土したことから、焼失建物と考えられる。出土遺物が細片であることから詳細な時期は不明であるが、SK16、SI4、SI3 の順に重複していたことから、SK16より新しく、SI3より古い弥生時代中期(Ⅳ期) 後半頃と判断できる。

SI7(図2)は、1区西端付近で確認した。長さ2.3m、幅0.45mの範囲を検出し、深さ0.3m、床面の高さはT.P.23.7mである。出土遺物が細片であることから遺構の詳細な時期は不明であるが、SI7の上層に重複するSD3から弥生時代中期(Ⅳ期)の甕、無頸壺、水平口縁高杯(図14-13～15)などが出土したことから、それ以前と判断できる。

2. 土坑

SK1～SK26(SK1、SK5は欠番)の24基を確認したが、ほとんどが不整形、もしくはプランの一部を検出したにとどまる。

SK2(図4)は、SI1と重複して検出した。直径2.6mの半円形を呈する。工事範囲から深さ0.4mまでの調査にとどめたが、遺構はさらに深くまで続く。上層埋土からは弥生時代中期のものを含む大量の土器が出土したが、下層埋土から出土した鉢(図14-3)、高杯(図14-4)などから、遺構の時期は弥生時代後期に比定される。

SK7、SK8、SK11(図7)は、重複して検出した。SK8がSK7とSK11より新しく、SK7とSK11の切り合いは不明である。SK7は幅0.76m、長さ1.6m、深さ0.1mの楕円形、SK8は幅0.5m、長さ0.6m、深さ0.1mの楕円形を呈する。SK11は幅0.7～1.3m、長さ2.0m以上、深さ0.1～0.25mを測る溝状の土坑である。3基とも弥生時代中期の甕が出土した。SK11から出土した甕（図 14-5）は小片のため口径が復元できなかったが、口縁端部の形状や器壁の厚さから、SD3出土の甕(図14-13)に類似すると考えられる。

SK16(図8)は、SI4の下層から検出した。長径1.5m、短径1. 0m、深さ0.8m以上の楕円形を呈する。弥生時代中期後半(Ⅳ期)の広口壺や高杯、蓋、甕（図14-6～9）などがまとまって出土した。

SK19(図2)は、3区東端で検出した。検出規模は、長さ5.7m、幅3.0m、深さ0.5mを測り、南北が調査区外に延びる。埋土から弥生時代中期後半（Ⅳ期）の甕などが出土した。

SK24(図9)は、3区西部で検出した。検出規模は、長さ6.4m、幅3.0m、深さ0.34mを測り、南が調査区外に伸びる。埋土から弥生時代中期後半（Ⅳ期）の甕などが出土した(図14-10)。

3. 溝

SD1～SD10の10条を確認した。このうちSD2(図10)は、1区東部で検出した。幅0.85m、深さ0.4mを測り、長さは1.1m分を検出したが、調査区外に延びるため全長は不明である。遺物は、弥生時代中期後半（Ⅳ期）の壺(図14-11)、大型椀形高杯(図14-12)などが出土した。

SD3(図13)は、1区西端でSK14の下層から検出した。幅0.6m、深さ0.7mを測り、長さは2.1m分を検出したが、調査区外に延びるため全長は不明である。遺物は、弥生時代中期後半（Ⅳ期）の甕、無頸壺、水平口縁高杯な

どが出土した(図 14-13～15)。

SD6、7(図 2・11)は調査区西端付近で一部が重複して検出した。SD6 の方が新しく、幅 0.9m、深さ 0.3mを測り、SD7 は幅 0.5m、深さ 0.26mを測る。長さはそれぞれ 3.2m、1.7m分を検出したが、調査区外に伸びるため全長は不明である。埋土から弥生時代中期後半（Ⅳ期）の遺物が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。長さは 2.1m分を検出したが、調査区外に伸びるため全長は不明である。弥生時代中期後半（Ⅳ期）の時期が推定されるが、出土遺物が細片であることから詳細な時期は不明である。

SD8(図 12)は 3 区西部で検出した。幅 1.7m、深さ 0.65mを測り、断面形状は逆台形を呈する。長さは 5.2m分を検出したが、調査区外に延びるため全長は不明である。弥生時代中期後半（Ⅳ期）の時期が推定されるが、出土遺物が細片であることから詳細な時期は不明である。

4. 柱穴

SP1～SP48 の 48 基を検出した。掘方は円形を指向し、直径は 0.25～0.3m、柱痕は直径 0.1m前後のものが大半を占める。SP10 や SP34 のように掘方の直径が 0.5mを超える例もあるが、埋土に差異はない。調査区が狭小であることから、同一建物を構成する柱穴を抽出することはできなかった。また、出土遺物も細片であることから、柱穴の詳細な時期は不明である。

第Ⅲ章　総括

今回は河野遺跡で初めての本発掘調査であり、調査範囲は狭小ながら、竪穴建物跡 7 基、土坑 24 基、溝 10 条、柱穴 48 基を確認し、遺跡の性格は散布地から集落跡に改められた。存続時期は、弥生時代中期後半(Ⅳ期)を中心に、後期（Ⅴ期）前半頃までの短期間であることから、小規模で単発的な集落、もしくは南東に隣接する辻井遺跡の集落規模が最も拡大した時期と存続時期が重なることから、広義的には、辻井遺跡に含まれる集落であった可能性も考えられる。

出土遺物については、SI1 出土台付壺(図 14-1)が特徴的である。体部上半が欠損していることから壺の器種は不明であるが、長脚の台に接合する体部下半の外面調整は、多角形状の横ミガキが施され、在地産に一般的な縦方向に放射状のミガキ調整とは明らかに異なっている。 台付壺（脚付壺)は弥生時代中期中葉から後期前半にかけて、岡山県を中心に中国地方（岡山・広島・鳥取・島根）に広く分布しており、兵庫県内でも神戸市の玉津田中遺跡、表山遺跡、多可町の宮ヶ谷遺跡、たつの市の福田片岡遺跡、北山遺跡、小神辻の堂遺跡、尾崎遺跡など少量ながら播磨全域で類例が散見される。しかし、中国地方の個体は体部下半の外面調整が横ミガキであるのに対し、県内出土の個体は多くが体部下半の外面調整は在地土器と同じ調整が施されている。SI1 出土例と同様の横ミガキを施す例は、福田片岡遺跡、北山遺跡、小神辻の堂遺跡などたつの市域での出土が目立つ。脚部の形状についても、備後、伯耆にも近いが、尾崎遺跡の高杯に類似しているとの指摘もあり、胎土も在地産であることから、間接的には吉備地方の影響を受けてはいるものの、直接的にはたつの市の揖西地域とのつながりが想定できる[註]。

【註】 SI1 出土台付壺の特徴、類例の分布域、時期等については、岡山県古代吉備センターの、石田為成氏及び、広島県教育委員会の村田晋氏、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターの篠宮正氏にご教示を賜った。また、吉備からの搬入品の可能性が考えられることから、岡山理科大学生物地球学部 白石純氏に胎土分析を依頼し、在地の胎土と推定されるとの分析結果をいただいた。玉稿を賜ったことに感謝申し上げるとともに、紙面が限られていることから本書に掲載できなかったことをお詫び申し上げる。

【参考文献】

今里幾次「播磨弥生式土器の動態(一)」『考古学研究』第 15 巻第 4 号　1969　考古学研究会
今里幾次「播磨弥生式土器の動態(二)」『考古学研究』第 16 巻第 1 号　1969　考古学研究会
河合忍「備前・備中地域」『弥生中期土器の併行関係発表要旨集』2004　埋蔵文化財研究会
篠宮正「播磨地域における弥生時代中期の土器編年と搬入土器」『弥生中期土器の併行関係発表要旨集』2004　埋蔵文化財研究会
多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡第 6 分冊』1996　兵庫県教育委員会
信里芳紀「讃岐地方における弥生中期の土器編年～凹線文期を中心にして～」『弥生中期土器の併行関係発表要旨集』2004　埋蔵文化財研究会
正岡睦夫・松本岩雄 編『弥生土器様式と編年―山陽・山陰編―』1992　木耳社
村田　晋「弥生時代中国地方における脚付長頸壺形土器について」『考古学研究室紀要』第 8 号　2016　広島大学大学院文学研究科考古学研究室
大手前大学史学研究所編『弥生土器集成と編年―播磨編―』（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第 5 号）2007　大手前大学史学研究所
龍野市教育委員会『小神辻の堂遺跡』1998
龍野市教育委員会『尾崎遺跡Ⅱ』1995
姫路市『姫路市史』第 2 巻　1970
姫路市『姫路市史』第 7 巻下（資料編考古）　2010

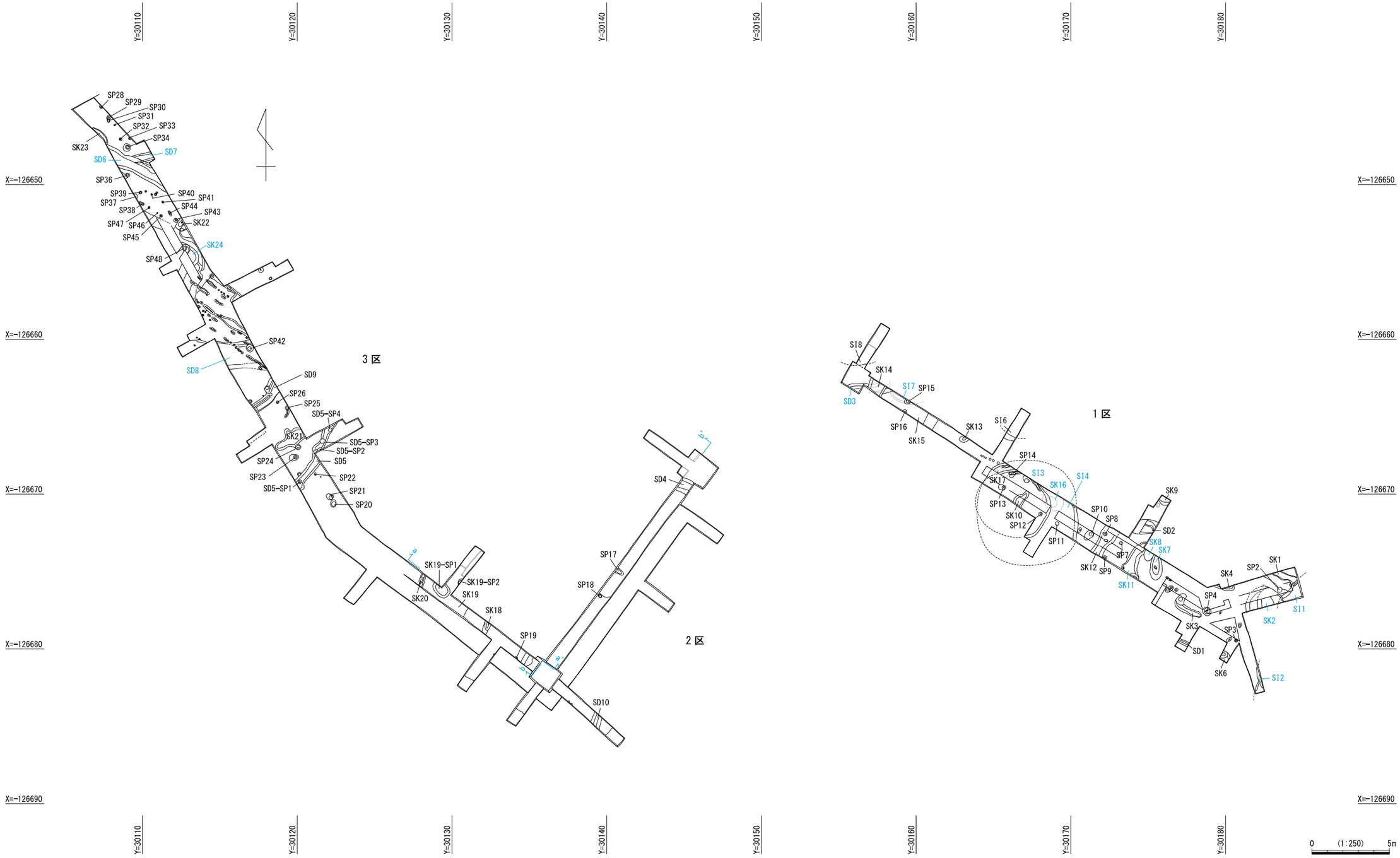
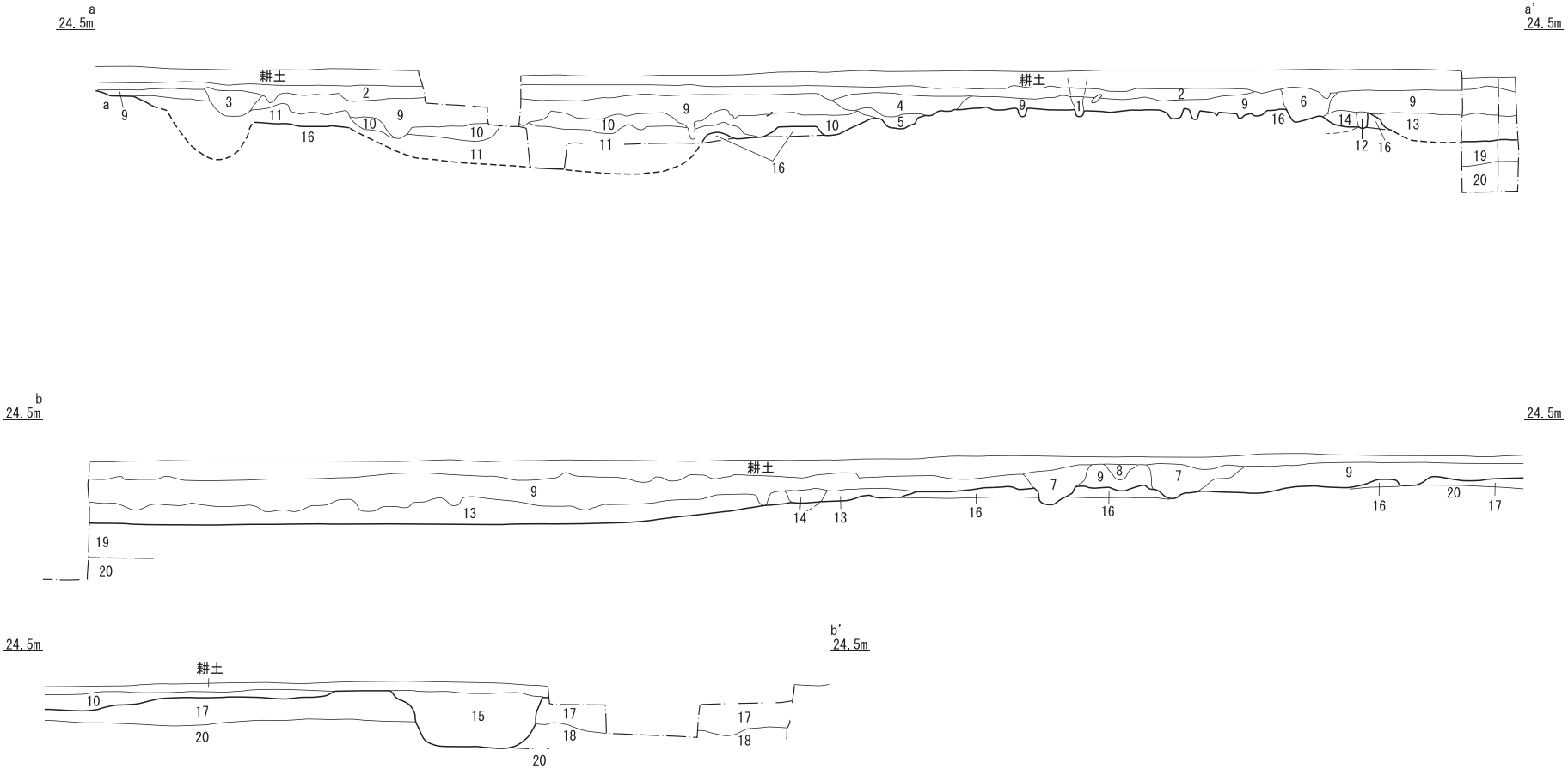

Y=30110
Y=30120
Y=30130
Y=30140
Y=30150
Y=30160
Y=30170
Y=30180
X=-126650
X=-126660
X=-126670
X=-126680
X=-126690
3 区
2 区
1 区
SP28
SP29
SP30
SP31
SP32
SP33
SP34
SK23
SD6
SD7
SP36
SP39
SP37
SP38
SP40
SP41
SP44
SP43
SP47
SP46
SP45
SK22
SK24
SP48
SP42
SD8
SD9
SP26
SP25
SD5-SP4
SK21
SD5-SP3
SD5-SP2
SD5
SP24
SP23
SD5-SP1
SP22
SP21
SP20
SK19-SP1
SK19-SP2
SK19
SK20
SK18
SP19
SP18
SP17
SD4
SD10
SI8
SK14
SI7
SP15
SD3
SP16
SK15
SK13
SI6
SP14
SI3
SK17
SI4
SK16
SP13
SK10
SP12
SP10
SP8
SK9
SD2
SK8
SK7
SP11
SP7
SK12
SP9
SK11
SK4
SP2
SK1
SP4
SI1
SK2
SK3
SP3
SD1
SK6
SI2
0
(1:250)
5m

図2　調査区 全体図

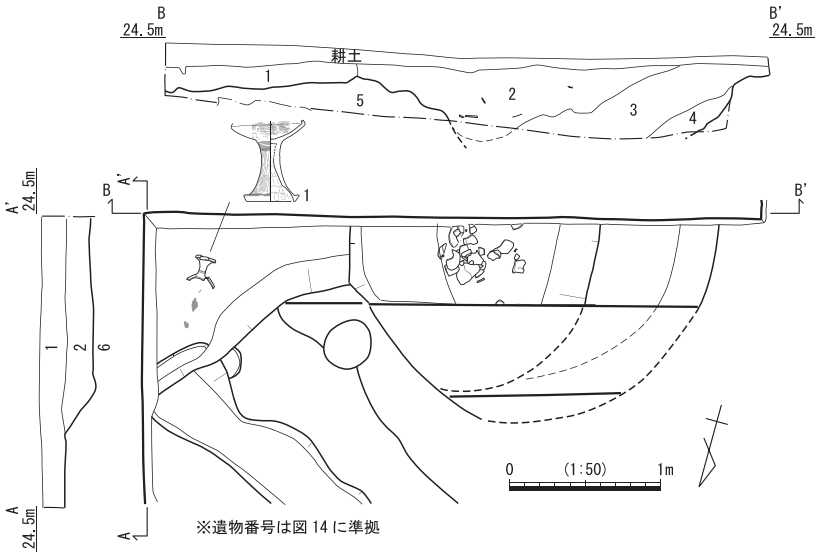


1. 2.5Y7/4 浅黄色～ 6/4 にぶい黄色小礫混じり細砂　耕土ブロック含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色～ 4/3 オリーブ褐色砂混じりシルト～細砂
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色細砂～粘土　→SK20
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色細砂～粘土　→SK18
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～粘土　→SK18
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色細砂～粘土　16 層ブロック含む　→SP49
7. 2.5Y3/1 ～ 2/1 砂混じりシルト～細砂　→SP18
8. 2.5Y7/4 浅黄色～ 6/4 にぶい黄色小礫混じり細砂
9. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色細砂～粘土 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色細砂ブロック含む
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色細砂～粘土　→SK19
11. 2.5Y5/3 黄褐色～ 5/2 暗灰黄色細砂～粘土　→SK19
12. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色砂混じりシルト～細砂　→SP17
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色シルト混じり砂質土　土器細片微量含む
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色シルト混じり砂質土　9 層ブロック含む
15. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/2 暗灰黄色砂、粗砂、小礫混じり細砂～シルト　→SD4
16. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層
17. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/3 オリーブ褐色砂礫　→基盤層
18. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色砂～粗砂　→基盤層
19. 2.5Y5/3 黄褐色シルト混じり砂
20. 2.5Y4/2 暗灰黄色円礫多量混じり砂礫

0　(1:50)　1m

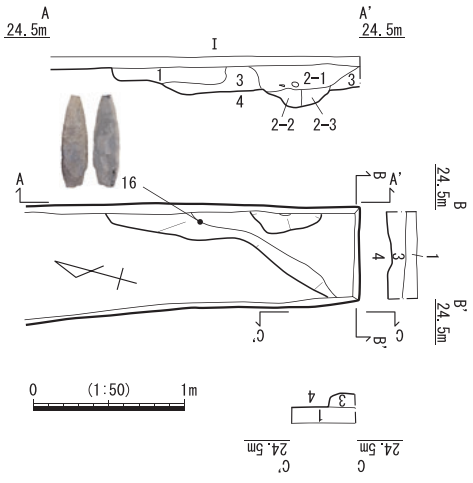
図3　調査区断面図

図版 2



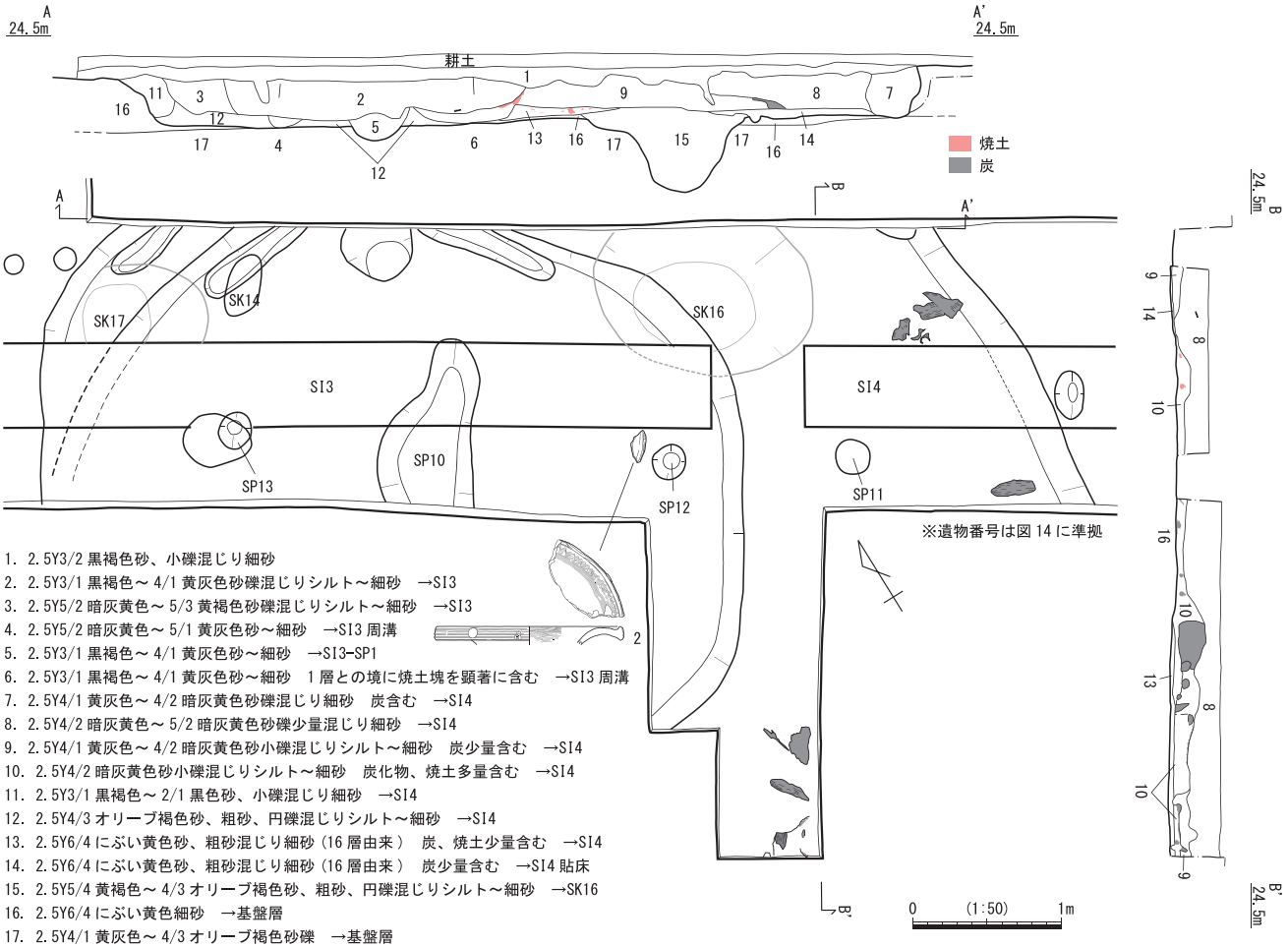
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 4/3 オリーブ褐色細砂
2. 2.5Y3/2 黒褐色細砂
3. 2.5Y5/4 黄褐色～ 5/2 暗灰黄色シルト、細砂混じり砂礫
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～中砂
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層

図4　SI1・SK2平・断面図



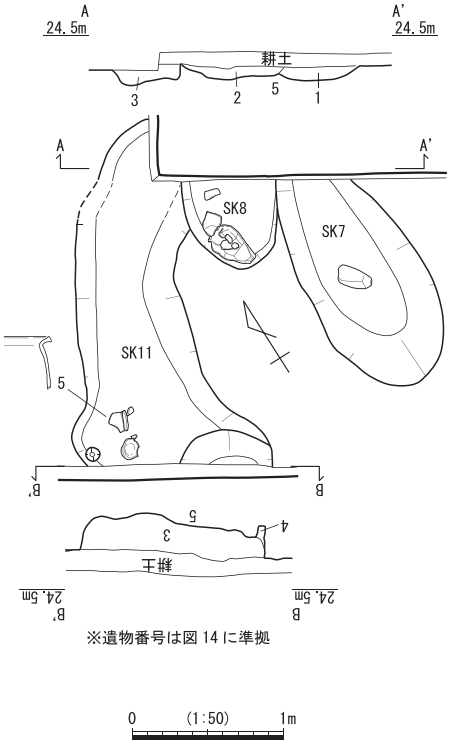
1.　2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂　炭、焼土含む
2-1. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 3/3 暗オリーブ褐色細砂
2-2. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 3/3 暗オリーブ褐色細砂
4 層ブロック（大）含む
2-3. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 3/3 暗オリーブ褐色細砂
4 層ブロック（小）含む
3.　2.5Y5/3 黄褐色細砂
4.　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層

図5　SI2平・断面図



1. 2.5Y3/2 黒褐色砂、小礫混じり細砂
2. 2.5Y3/1 黒褐色～ 4/1 黄灰色砂礫混じりシルト～細砂　→SI3
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色砂礫混じりシルト～細砂　→SI3
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/1 黄灰色砂～細砂　→SI3 周溝
5. 2.5Y3/1 黒褐色～ 4/1 黄灰色砂～細砂　→SI3-SP1
6. 2.5Y3/1 黒褐色～ 4/1 黄灰色砂～細砂　1 層との境に焼土塊を顕著に含む　→SI3 周溝
7. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/2 暗灰黄色砂礫混じり細砂　炭含む　→SI4
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 5/2 暗灰黄色砂礫少量混じり細砂　→SI4
9. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/2 暗灰黄色砂小礫混じりシルト～細砂　炭少量含む　→SI4
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂小礫混じりシルト～細砂　炭化物、焼土多量含む　→SI4
11. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色砂、小礫混じり細砂　→SI4
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂、粗砂、円礫混じりシルト～細砂　→SI4
13. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂、粗砂混じり細砂（16 層由来）　炭、焼土少量含む　→SI4
14. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂、粗砂混じり細砂（16 層由来）　炭少量含む　→SI4 貼床
15. 2.5Y5/4 黄褐色～ 4/3 オリーブ褐色砂、粗砂、円礫混じりシルト～細砂　→SK16
16. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層
17. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/3 オリーブ褐色砂礫　→基盤層

図6　SI3・SI4 平・断面図



1. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/2 暗灰黄色細砂　→SK7
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 3/2 黒褐色細砂　→SK8
3. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/2 暗灰黄色細砂　→SK11
4. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/2 暗灰黄色細砂 5 層ブロック含む　→SK11
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層

図7　SK7・SK8・SK11 平・断面図

SK16遺物出土状況（南西から）

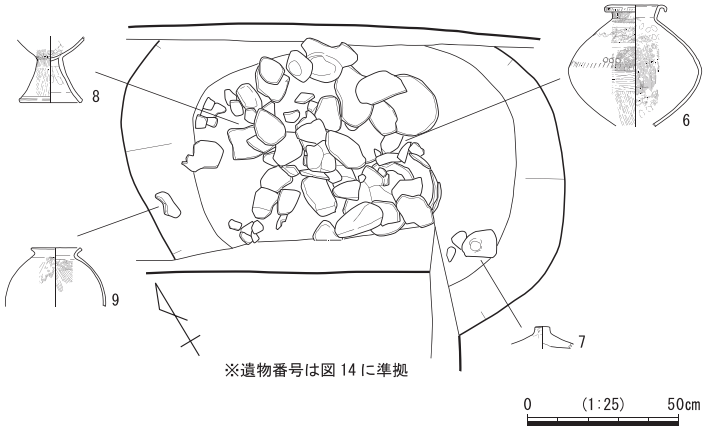
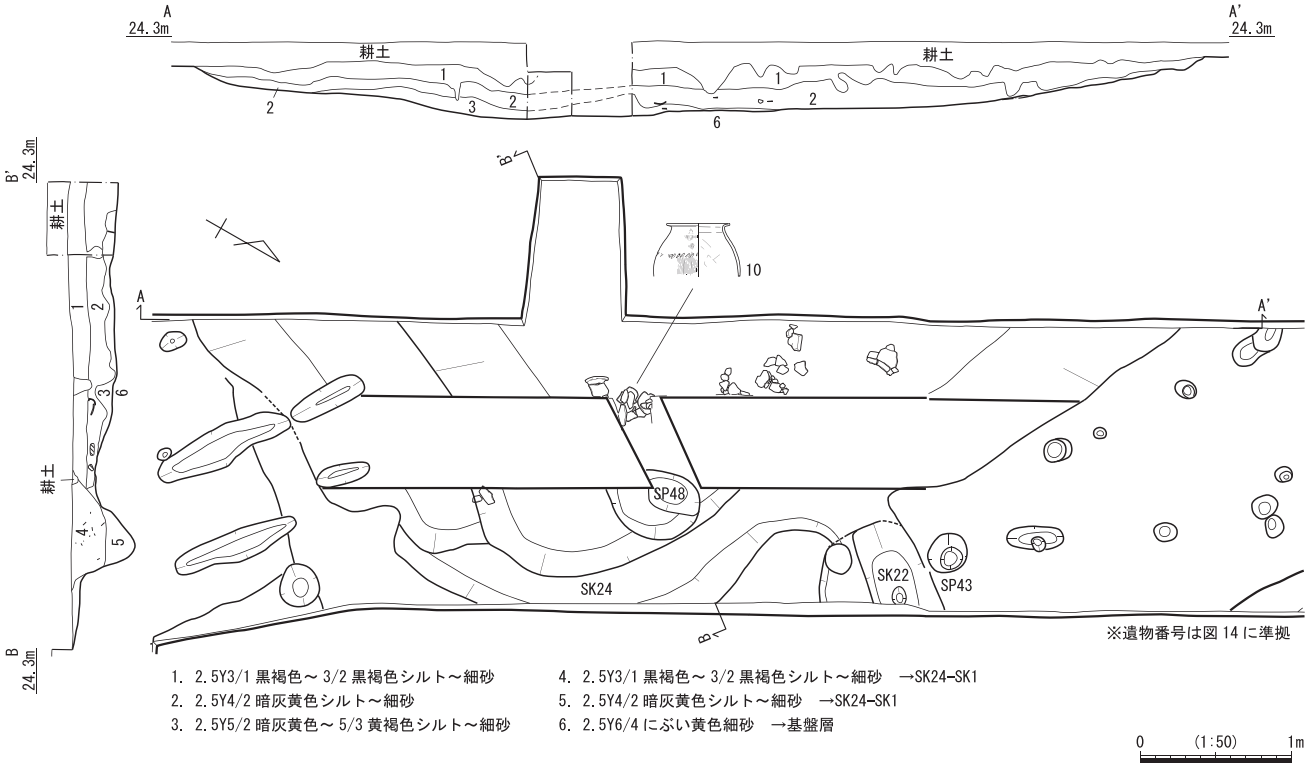
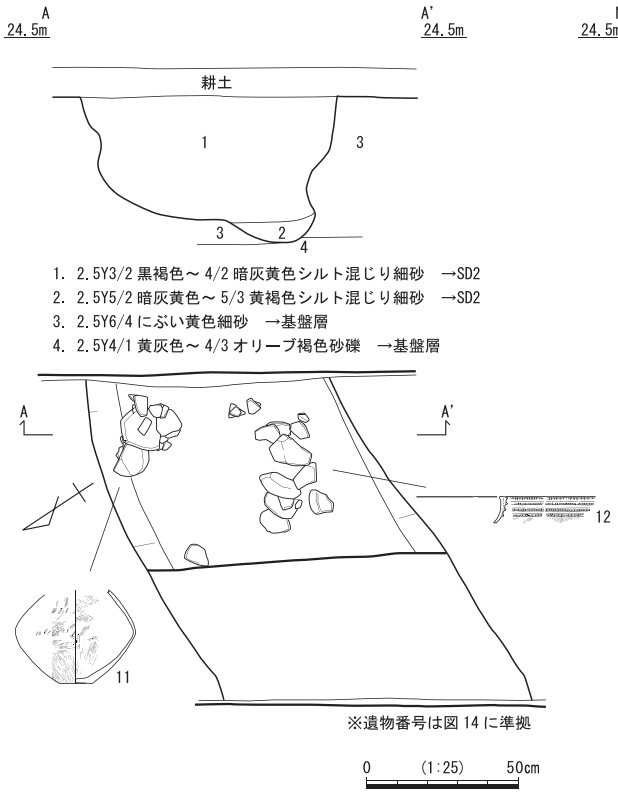


図8　SK16 平面図



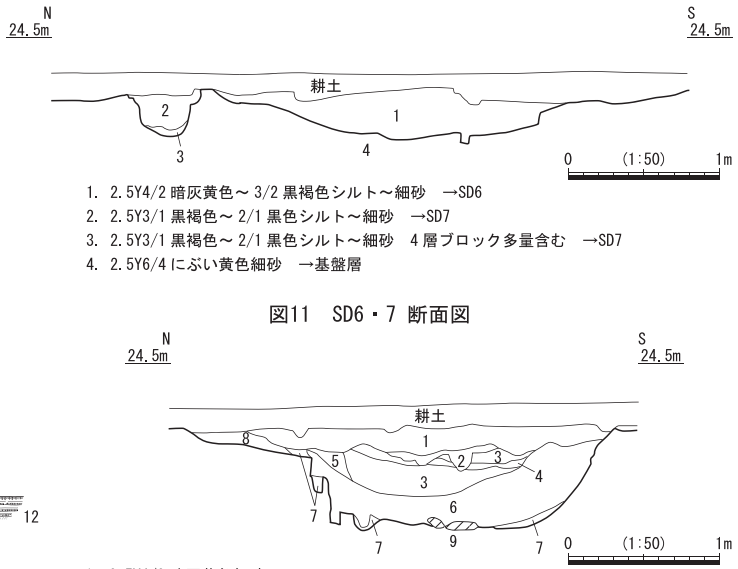
1. 2.5Y3/1 黒褐色～ 3/2 黒褐色シルト～細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色シルト～細砂
4. 2.5Y3/1 黒褐色～ 3/2 黒褐色シルト～細砂　→SK24-SK1
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂　→SK24-SK1
6. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層

図9　SK24 平・断面図



1. 2.5Y3/2 黒褐色～ 4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂　→SD2
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色シルト混じり細砂　→SD2
3. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層
4. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/3 オリーブ褐色砂礫　→基盤層

図10　SD2 断面図・遺物出土状況図

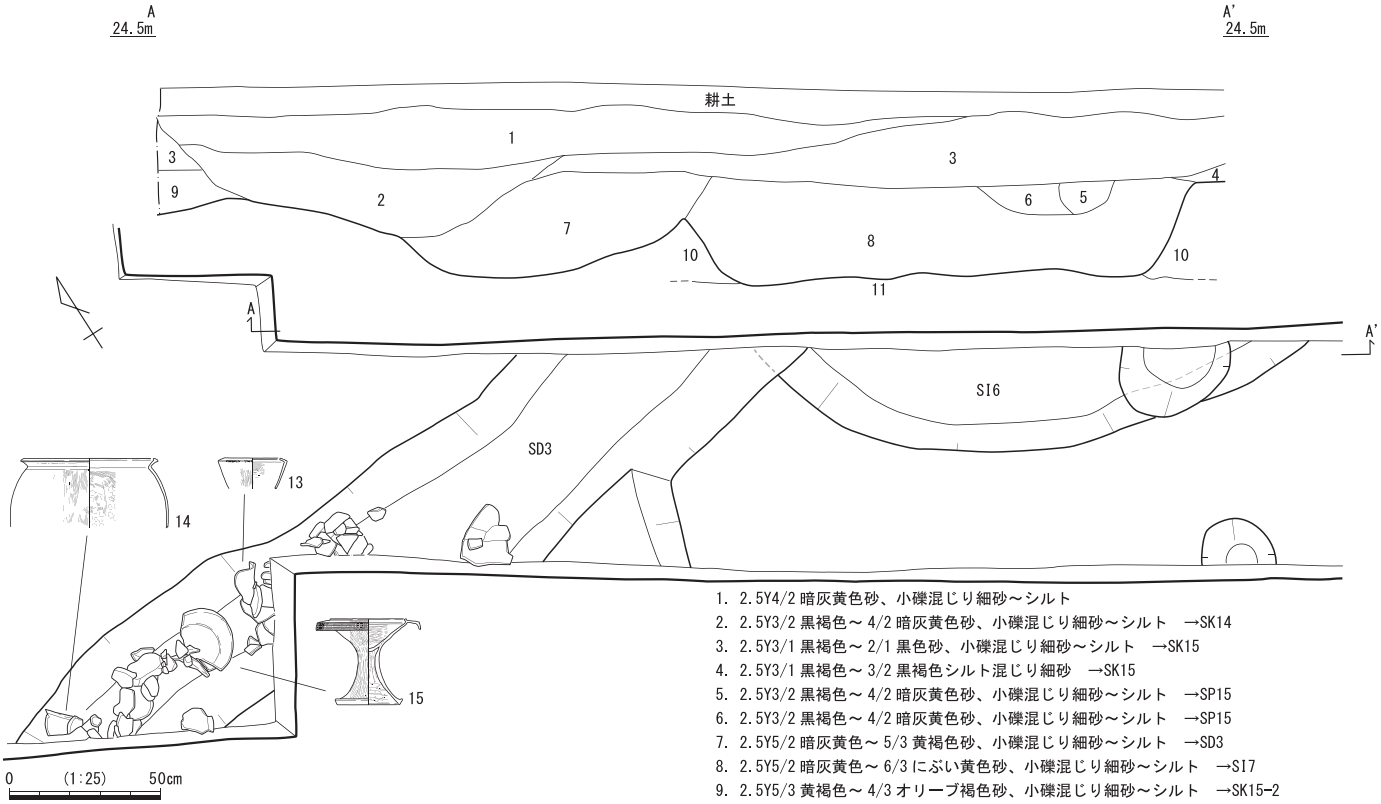


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 3/2 黒褐色シルト～細砂　→SD6
2. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色シルト～細砂　→SD7
3. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色シルト～細砂　4 層ブロック多量含む　→SD7
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層

図11　SD6・7 断面図

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰色細砂　3 層ブロック含む
3. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色シルト～細砂ブロック　9 層ブロック多量（6 割程度）、炭片少量含む
4. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色シルト～細砂ブロック　9 層ブロック少量（2 割程度）、炭片少量含む
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂　3 層ブロック多量、炭片少量含む
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色～ 3/2 黒褐色細砂～シルト
7. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂（9 層由来）　2.5Y4/1 黄灰色シルト～細砂ブロック微量含む（1 割程度）
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
9. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層

図12　SD8 断面図



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂、小礫混じり細砂～シルト
2. 2.5Y3/2 黒褐色～ 4/2 暗灰黄色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SK14
3. 2.5Y3/1 黒褐色～ 2/1 黒色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SK15
4. 2.5Y3/1 黒褐色～ 3/2 黒褐色シルト混じり細砂　→SK15
5. 2.5Y3/2 黒褐色～ 4/2 暗灰黄色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SP15
6. 2.5Y3/2 黒褐色～ 4/2 暗灰黄色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SP15
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/3 黄褐色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SD3
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色～ 6/3 にぶい黄色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SI7
9. 2.5Y5/3 黄褐色～ 4/3 オリーブ褐色砂、小礫混じり細砂～シルト　→SK15-2
10. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　→基盤層
11. 2.5Y4/1 黄灰色～ 4/3 オリーブ褐色砂礫　→基盤層

図13　SD3 断面図・遺物出土状況図

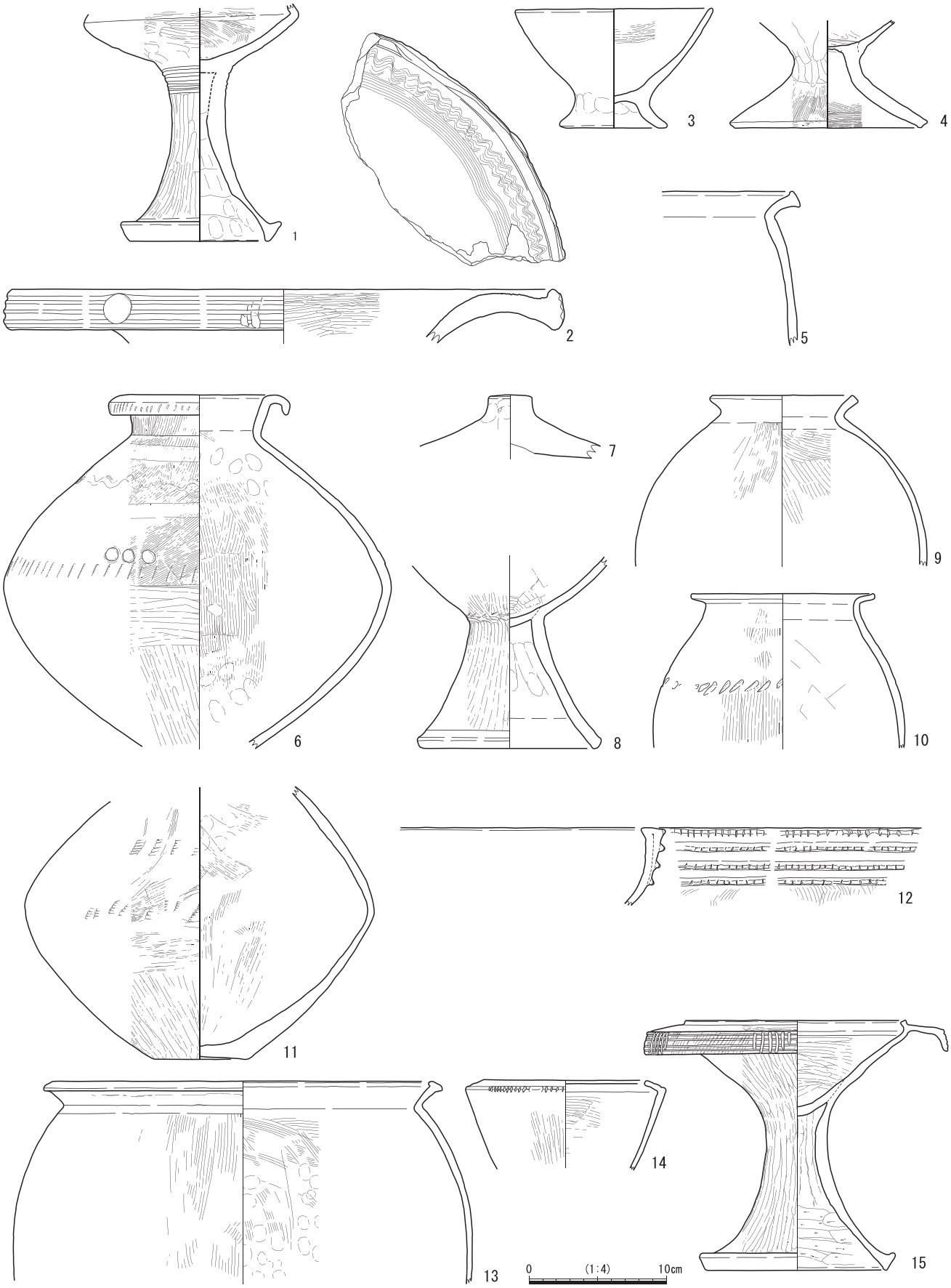


図14　出土遺物実測図

写真 1 遠景（西から）

写真 2 調査区東部 全景（北西から）

写真 3 調査区西部 全景（北西から）

写真 4 調査区東端 全景（西から）

写真 5 調査区中央部 全景（北東から）

写真 6 調査区西端 全景（北西から）

写真 7 SI1・SK2（東から）

写真 8 SI1・SK2 断面（南から）

写真 10 SI2（西から）

写真 9 SI1 遺物出土状況（南から）

写真 11 SI2 石器出土状況（西から）

写真 12 SI3・SI4（北西から）

写真 13 SI3・SI4 断面（西から）

写真 14 SI4 断面（北から）

写真 15 SI6（東から）

写真図版 3

写真 16 SK7・SK8 遺物出土状況（北から）

写真 17 SK11 遺物出土状況（北から）

写真 18 SK11（北から）

写真 19 SK19（北西から）

写真 20 SK19 断面（西から）

写真 21 SK24（北西から）

写真 22 SK24 断面（北東から）

写真 23 SD2（東から）

写真 24 SD2 断面（西から）

写真 25 SD3（西から）

写真 26 SD3 遺物出土状況（北から）

写真 27 SD4（北東から）

写真 28 SD6・SD7 断面（西から）

写真 29 SD8 断面（西から）

写真 30 SD8（西から）

写真31　出土遺物写真　※写真の番号は表1に準拠

番号	種別	器種	出土遺構	取上番号	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
1	弥生土器	台付壺	SI1	№1	最大径 15.6	10.2	(17.2)	10YR7/4	10YR4/2	普通	φ5mm以下の砂粒を含む	杯部1/2 脚部1/1	脚部：ヘラ描直線文、縦ミガキ 杯部：横ミガキ	ナデ	吉備系土器
2	弥生土器	広口壺	SI3	№1	(39.6)	—	(3.8)	2.5Y6/2	10YR7/4	普通	φ1.5mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/5	口縁端部：凹線文、円形浮文、棒状浮文	櫛描直線文、櫛描波状文、横ミガキ	
3	弥生土器	鉢	SK2	№1	14.2	7.8	8.7	7.5YR8/6	5YR7/6	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	1/1	ナデ	ナデ 上部：横ミガキ	
4	弥生土器	高杯	SK2	下層№1、№2	—	13.5	(7.8)	7.5YR6/4	5YR6/6	普通	φ1.5mm以下の砂粒を少量含む	杯部の底部 脚部1/1	脚部：縦ハケ 杯部：縦ケズリ	脚部：横ハケ 杯部：ケズリ	
5	弥生土器	甕	SK11	№2	(34.2)	—	(11.1)	10YR7/4	2.5Y6/2	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/10	不明	不明	
6	弥生土器	広口長頸壺	SK16	№5	11.0	—	(25.7)	10YR7/4	10YR7/4	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口縁部2/3 体部1/2	口縁端部：櫛先列点文 体部上半：櫛描波状文、櫛描列点文、円形浮文(5ヶ所？)、ハケ 体部下半：横、縦ミガキ	縦ハケ	
7	弥生土器	蓋	SK16	№7	ツマミ径 3.2	—	(4.6)	5YR6/6	2.5YR6/6	普通	φ4mm以下の砂粒を含む	ツマミ1/1 頂部1/4	ナデ	ナデ	
8	弥生土器	高杯	SK16	№7	—	13.4	(13.9)	10YR7/4	10YR5/3	普通	φ3mm以下の砂粒を含む	脚部8/9	縦ミガキ	杯部：ハケ 脚部：ナデ	
9	弥生土器	甕	SK16	№9、10、11	10.1	—	(12.4)	7.5YR6/6	5YR6/6	普通	φ3.5mm以下の砂粒を少量含む	口縁部4/5 体部1/3	縦ハケ	ハケ	
10	弥生土器	甕	SK24	№3-2	(13.2)	—	(11.2)	10YR7/4	2.5Y6/2	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/4 体部1/2	縦ハケ、ヘラ先刺突文	ナデ	
11	弥生土器	広口長頸壺	SD2	№2-2	—	6.9	(19.8)	5YR7/4	2.5YR7/8	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	体部～底部	体部上半：ハケ、櫛描列点文 体部下半：横、縦ミガキ	縦ハケ	
12	弥生土器	大型椀形高杯	SD2	№1-2	(41.2)	—	(5.6)	2.5YR5/8	10YR8/4	普通	φ1.5mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/7	貼付突帯、刻目 縦ハケ	ナデ	
13	弥生土器	甕	SD3	№11	(27.4)	—	(14.5)	5YR6/6	5YR6/6	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/4	縦ハケ	ハケ	
14	弥生土器	無頸壺	SD3	№3	(11.8)	—	(6.3)	10YR7/4	10YR8/4	普通	φ1.5mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部1/5	口縁屈曲部:刻目 縦ミガキ	ハケ	
15	弥生土器	水平口縁高杯	SD3	№3、5、6、7、9	15.7	13.0	18.0	7.5YR7/4	7.5YR7/3	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	1/1	口縁端部：ヘラ描斜線文、櫛描直線文、棒状浮文(6ヶ所) 杯部～脚部：縦ミガキ	杯部：横ミガキ 脚部：ケズリ	
16	石器	石剣	SI2	№1	最大長 (12.2)	最大幅 3.2	最大厚 1.4	2.5Y6/1~ 2.5Y5/1	—	—	石材:サヌカイト（金山産）	先端部欠損	—	—	重量60.93g

表1　出土遺物観察表

報告書抄録

ふりがな	かわのいせきーだい１じはっくつちょうさほうこくしょー
書名	河野遺跡ー第１次発掘調査報告書ー
副書名	
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 107 集
編著者名	小柴 治子
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1　　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和 3 年（2021 年）3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわのいせき 河野遺跡	兵庫県姫路市田寺四丁目 362 番、364 番、366 番、378 番 1	28201	020200	34°51′28″	134°39′47″	2019. 10. 9 ～ 2019. 11. 22	273 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
河野遺跡	散布地	弥生時代	竪穴建物跡、土坑、溝、柱穴	弥生土器	20190365

概要

今回は河野遺跡で初めての本発掘調査であり、調査範囲は狭小ながら、竪穴建物跡 7 基、土坑 24 基、溝 10 条、柱穴 48 基を確認し、遺跡の性格は散布地から集落跡に改められた。存続時期は、弥生時代中期後半(Ⅳ期)を中心に、後期（Ⅴ期）前半頃までである。

出土遺物については、SI1 出土台付壺が特徴的である。体部上半が欠損していることから壺の器種は不明であるが、長脚の台に接合する体部下半の外面調整は、多角形状の横ミガキが施される。このことから、吉備地方の影響が考えられるが、脚部の形状がたつの市尾崎遺跡出土の高杯と類似することや胎土が在地産と推定されことから、直接的にはたつの市揖西地域とのつながりが想定できる。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第 107 集

河野遺跡第１次発掘調査報告書

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目 1 番地

発 行 日　令和 3 年（2021 年）3 月 31 日

印刷・製本　松尾印刷株式会社
〒671-0222　兵庫県姫路市別所町小林 494